



日本語教育のための日本語文法研究

杉村 泰（日本語教育学）

私の研究テーマは日本語学習者のための日本語文法です。たとえば、「10時に寝る」と「10時で寝る」はどう違うか、「彼にキスをする」と「彼とキスをする」はどう違うかということ进行分析して、どのように外国人に説明すると分かりやすいかを研究しています。

大学の学部時代は中国古典文学の研究室にいました。そのとき、研究室の留学生から「窓が開いている」と「窓が開けてある」はどう違うか、「黒板に字が書いてある」は正しいのに「黒板に字が書いてある」はなぜ間違いなのかと聞かれ、うまく答えられなかったのが日本語文法に興味を持ったきっかけです。こうして大学院では日本語教育を専攻しました。大学院時代は、週3～4日愛知県内の高校で非常勤講師をしながら修士論文や博士論文の研究をしていました。博士後期課程のときには、2年間休学して中国の北京第二外国語学院で日本語を教えました。この時の経験が現在の研究につながっています。

中国人日本語学習者は日本人なら「風でドアが開いた」と言うところを「開けられた」と言い、「かばんに物が入らない」を「入れられない」と言い、「(目の前の人に) その口紅きれいね」を「この口紅」と言う傾向があります。これらのことは、日本人と中国人の物の見方の違いから来ています。そのため、日本語教育では単に誤用の訂正をするだけでなく、現象世界を見る観点の違いを説明することが必要となります。現在、指導生には日本人だけでなく中国人、韓国人、ベトナム人、イラン人、ロシア人がいます。授業ではそれぞれの母語と対照しながら、日本語文法の特徴について議論しています。

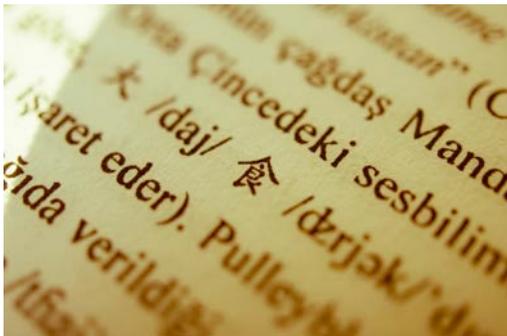


(写真はウズベキスタン訪問時に筆者撮影)

言語学専門で何を学ぶか

分野・専門紹介—File11

分野・専門名：言語学



言語学といっても何をやっている分野なのか、なかなか（さっぱり？）わかりません。大昔に書かれた文書を読む。いろいろな言語をマスターする。このあたりが言語学と聞いて連想される活動でしょう。実際には言語学分野にいる人たちの大半はこういったことをする人たちではありません。言語学分野を覗いてみると、例えばこんな人たちがいます。

人の話（発話）を /buxoroja todzike/ のように記号で書きとっている人たち。会話で相手の発言を聞き返すときに使われる

“huh?”といった単語が世界の言語で普遍的に用いられているかを調べている人たち。呼気流量や声帯の振動数を計測している人たち。ウィキペディアの記事を編集する複数言語併用者が使う言語の組み合

わせを集計している人たち。文の意味を $\forall x\exists e(\text{Meeting}(e) \wedge \text{Agent}(e,x) \wedge \text{Theme}(e,a))$ といった記号で書いている人たち。この人たちは違う方法で人間の言語とは何かという問いへの答えを見つけようとしています。

「でもこの人たちのしていることはバラバラじゃないかーお互いに話も通じないのではないか」 そう思うかもしれません。しかし、意外にもこの人たちの間ではかなり話が通じます。それは全員が「言語学」の訓練を受けているからです。物理学者の間で数学が共通言語であるように、言語学分野にいる人の間でも共通言語と呼べる一揃いの概念や理論があり、彼(女)らはそれを身につけているのです。当然ながら、言語に関するあらゆる「なぜ」への答えを見つけようとする際にはこの共通言語が役に立ちます。この共通言語は名古屋大学文学部の言語学分野で身につけることができます。

人間のことばに対する認識を変えてみてほしい。それが私たちの希望です。言語に関する「なぜ」の問いを持つ方を言語学分野は歓迎します。
(井土 慎二・准教授 堀江 薫・教授)

分野・専門紹介—File12

摩訶不思議な国を読み解く

分野・専門名：インド哲学

「色，形，大きさも異なる2本のペンがここにある。これらを同じくペンと呼ぶ，何故か。それはペン性という本質があるからだ。」これが私とインド哲学との出会いでした。インド哲学といっても，その内容は非常に広範です。皆さんがまず思い浮かべる仏教だけでも年代，地域で別物になりますし，ほかにもヒンドゥー教をはじめ様々な分野があります。叙事詩・物語などの文学作品や法典類・文法学を研究する学生もいます。



インド人の考えについては，一度授業を受けただけでは腑に落ちない点もあり，授業後に疑問が湧くこともしばしばあります。休み時間に疑問点を学生同士，そして時には先生も参加し冗談を交えながら，お茶菓子とともに楽しく考えを深めています。話に耳を傾けているだけでも新たな知識が加わり，授業並みの価値をもつ雑談会となっています。授業ではサンスクリット語，パーリ語，時にはチベット語で記された文献を辞書と格闘しながら仲間と教えあって読んでいます。文献を読み進めると遙か過去のものとは思えないほど精緻な思想に感動を覚えます。そしてその思想と自己や現代社会との結びつきに気づいた瞬間に，摩訶不思議な異国の哲学ではなくなります。写真は年に一度，秋に泊まりがけで行く研究室旅行の様子です。卒業論文の中間発表会をメインにしている，毎回熱い議論を繰り広げています。夜の打ち上げも劣らずに盛り上がります。

「インド文化学」から装い新たに「インド哲学」となった当研究室ですが，その実質は変わりません。少しでも興味を持っていただけた方は，当研究室のパンフレット，HPなどをぜひご覧ください。

(写真は2016年度研究室旅行 鳥羽にて) (罇廻 信・前期課程2年)

最近の文学部

この号が出る頃は...

8月初旬から始まった大学の長い夏休みも終わり，新学期です。大学生の夏は課外活動に加え，学習や研究を熟成させる時期。特に外国語関連の専門分野では，前期に習得したことが白紙に...となるとその後が悲劇です。(YK記)

*本紙では，名大文学部の多彩な内容を順に紹介していきますが，それまで待てない人は...
名大文学部のWEBサイト <http://www.lit.nagoya-u.ac.jp/> まで (『月刊名大文学部』のバックナンバーもあります)